

## カンボジア 工場労働者のための子宮頸がんを入口とした 女性のヘルスケア向上プロジェクト

Newsletter from SCGO-JSOG Project on Women's Health and Cervical Cancer

No. 15 January 2017

### 女性の健康に関する健康教育を実施する工場の拡大

当プロジェクトでは、2016年3月に実施しました工場労働者の女性の健康や子宮頸がんの意識調査の結果に基づき、健康教育教材を作成し、2016年8月にSumi (Cambodia) Wiring Systems Co., Ltd.にて最初の健康教育を実施しました。講義後には多くの健康教育参加者から質問があり、関心の高さが窺えました。

その後、プノンペン経済特区の日系企業会合の定例会で、松本安代医師がプロジェクトの説明をし、工場での女性の健康教育に関心を示して下さった企業のうち、日系電子部品メーカー1社とKaneju (Cambodia) Co., Ltd.にて、2017年1月より数回に分け、健康教育を行うことになりました。

工場でのこれまでの健康教育の実施状況や、工場側の実施してほしい健康教育内容の希望等を事前に打ち合わせをし、各々の工場の状況に合わせ、実施する健康教育の内容を決めています。

1月30日にプノンペン経済特区内の日系電子部品メーカー工場にて健康教育を実施しました。

今回、初めてとなる健康教育には、工場内の希望者94名が参加しました。大半を20歳前後の女性が占め、男性の参加者は4名のみでした。講師は、カンボジア国立母子保健センター所属のセイン ブッタ助産師が務めました。今回取り扱ったテーマは以下の通りです。

1) 基本的な衛生、2) 女性の身体、3) 家族計画、4) 妊娠中のケア、5) 子宮頸がん

講師の問いかけに対し参加者が積極的に答える等、インタラクティブな形式で講義が進みました。今回の講義では、工場研修部より提案のありました「子宮頸がん啓発ロールプレイ」も取り入れ、研修部スタッフが工場医務室の看護師役と相談者役をそれぞれ務めました。途中、アドリブで冗談も飛び出すなど和気藹々とした雰囲気が進み、参加者が興味を引くよう工夫をしながら構成している様子が伺えました。

質疑応答セッションでは、予定時間を超過する多くの質問が寄せられました。内容としては、月経痛や月経不順に関連した質問が多く、参加者の多くが20歳前後ということもあり、特に関心の高い分野だったようです。一つ一つの質問に対し、カンボジア産婦人科学会理事のサン チャンスーン医師が丁寧に回答しました。参加者にとって、今まで相談できなかった女性特有の身体の悩みを医師に相談できる良い機会となったようです。

これまでの婦人科は敷居が高いというイメージから、気になることがあれば医師に相談し、病気を未然に防ぐことにつながるよう、今後の講義を通じて参加者に伝えていきたいと思えます。

工場での活動担当 下地美歩子



(写真) プノンペン経済特区 (PPSEZ) 正面



(写真) 健康教育風景



(写真) 健康教育を行う助産師のブッタさん



(写真) 大好評の工場研修部スタッフの寸劇



(写真) 次から次へと手が挙がる 講義後の質疑応答

## 日本産科婦人科学会員の医師による実地指導

1月15～21日の間、横浜市立大学より佐藤美紀子医師とルイズ横田奈朋医師が派遣され、プロジェクト対象のクメールソビエト病院、カルメット病院、国立母子保健センター病院でコルポスコピーの技術指導、患者登録の指導、子宮頸がんスクリーニングの実施手法の検討、提言などの活動を行いました。

横浜市立大学 佐藤美紀子 ルイズ横田奈朋

2017年1月16日から20日にかけて、今年度のこのプロジェクトチーム最終チームとしてカンボジア国立3病院を訪問しました。これまでに派遣された先生方の活動を引き継ぐ形で①コルポスコピー検査の手技指導、②頸がん検診に関するRegistration bookの使用状況の確認、③ミニレクチャー(HPVワクチン)、④症例検討会、そして⑤6月から工場労働者を対象としてパイロットが予定されている、HPV DNA テストを first screening に設定した子宮頸がん検診の具体的なプロトコル作成に関する話し合いに参加しました。

これまでの成果もあり、現地の医師によるコルポスコピーの手技、所見の取り方、生検採取は十分習熟していることを確認しました。しかしコルポ適応症例の選び方やコルポスコープ機械の操作(焦点合わせなど)、細胞診検体の取り扱い、コルポスコープ所見を含めた診療記録に関しては未だ課題があると感じました。LEEP 手術に立ち会う機会がありましたが、人員・物品準備が不十分なままに手技を開始するなど、今後症例数が増加した場合には事故につながりかねない課題点も残っており、今後も指導の継続が必要と思われます。

クメールソビエト病院と母子保健センターでは細胞診と組織診を鏡検する機会がありましたが、検体の乾燥が強く評価が困難なスライドが多くみられました。コルポスコープ手技が安定しつつある現在、次には検体処理、診断ともに病理検査の質の安定が課題であると感じました。ミニレクチャーでは、HPV ワクチンについてWHOの推奨に基づいて世界の趨勢について説明を行いました。カンボジアは国のプログラムによる予防接種の受診率は高いようで、HPV ワクチンについても副作用も含め抵抗感なく受け入れておられ、現地の心配は金銭面だけ、という様子でした。一部地域でパイロットスタディとして若年女性に対する HPV ワクチン接種が開始されており、全国的導入がそう遠くない将来達成するでしょう。今回支援する立場であった我々も、より真剣に考えてゆかねばならないと感じました。

症例検討会では数回のコルポスコープ検査と生検を要した経過が複雑な症例が提示されました。普段から詳細な診療記録を記載する習慣がない現地の先生たちのプレゼンテーションは、改善の余地ありと言わざるをえない部分もありましたが、病院の垣根を超えて多くの先生たちが非常に活発な議論をしているのが印象的でした。最後に感想を求められた時には、今後も継続的にこのような症例検討会を行えば相当のレベルアップが確実なので、是非継続していただきたいと伝えました。

昨年11月に藤井理事長、川名幹事、東医師が派遣された際に工場労働者を対象とした子宮がん検診の導入プロジェクトではVIAではなくHPV DNA テストを first screening として使用することになったため、それを踏まえた具体的なプロトコル作成会議が行われました。活発な討議がなされ、日産婦から提示された素案を基にカンボジア独自の事情を勘案したカンボジア産科婦人科学会版プロトコル草案が完成しました。今後はこの草案をJSOGと検討したのちにプロトコルを決定していく予定です。

今回の派遣事業全体を通じて、カンボジア医師の非常に高いモチベーションを感じることができました。われわれもそれに答えようと、支援および討論をすることでお互いに良い刺激を受けることができました。このような貴重な機会を賜りました JICA、JSOG はじめ、同行していただきました藤田則子先生、赤羽宏基先生、現地事務局の野中さんをはじめ、多くのスタッフの皆様に深く感謝申し上げます。



(写真) 外来での技術指導



(写真) ミニレクチャー風景



(写真) プロジェクト理事会にて HPV テストの流れの確認



(写真) 感謝状授与式後の集合写真



(写真) クメールソビエト病院の医師達と

国立国際医療研究センター 産婦人科/国際医療協力局  
レジデント赤羽宏基



今回私は、国立国際医療研究センターレジデントおよび日本産科婦人科学会会員として、婦人科腫瘍専門医の先生方と共にカンボジアを訪問させて頂き、現地スタッフの勤務の様子を拝見させて頂きました。現地スタッフの中には2016年9-10月にかけての1ヶ月間日本での研修を受けている医師もおり、日本での研修がどのように活かされているかという視点で視察致しました。

彼女達が日本での現場を見た際に、カンボジアに戻ったら行いたい事の一つとして、患者登録を挙げておりました。それに関し、不完全な部分もありましたが、どの病院もコルポスコピーを行った患者の登録台帳の記入を行っておりました。現時点ではExcelに登録している病院は1つしかありませんでしたので、今後はシステム管理での患者登録が広まっていけばよいと思いました。まだ始まったばかりでもあり、これからの現地医師の継続した努力が必要だと思いました。

次に挙げていたのが病理部との連携です。日本の研修で病理カンファの参加や病理検体スライドを供覧する実習などに刺激を受け、自分たちの病院でも積極的に病理医師とコンタクトを取り、実臨床に活かそうとする姿勢が見られました。今後の課題としては病理検体の質がまだ不十分な点もあるため、その点も踏まえた病理診断の質の向上、そして婦人科医自身が病理検体を判読・診断できるようになる事が課題となるのではないかと感じました。

最後に挙げていたのがカンボジア医師全体の連携の事でした。彼女達は日本の研修で得た経験をカンボジアの医師と共有したいと感じており、自分だけではなくカンボジア医師全体のレベルアップを視野に入れるようになっていました。その為に症例検討会を定期的に関いたりすることによりお互いの知識・技術の向上を図りたいという意思が見え、強く感心しました。

今回の視察で、日本での研修が活かされており、彼女達が今後のカンボジア産婦人科医の中心となって活躍するであろうという実感がありました。今後も彼女達の活躍に期待しつつ、そして今後の自分自身の産婦人科研修ならびに協力局での活動の糧にしていきたいと思いました。

国立国際医療研究センター国際医療協力局 保健師 折山瑠美



1/30~2/3の間で、保健師として主に健康教育に関連した活動へ同行させて頂きました。特に印象強かった1/30 第1回日系電子部品メーカー工場での健康教育では、講義実施者(プロジェクトの助産師)がテンポよく受講者(工員 94名、主に20代)全体に問いかけをして、全員一斉に答えさせたり、要点を復唱させるという唱和型講義でした。3時間と長めの講義だったにもかかわらず、全員が最後まで集中し、間の寸劇では笑いも聞かれ、終始発言が飛び交う活気のある講座で驚きました。

日本の大人向けの講座は静かなことが多いので、文化の違いを感じます。質疑応答も活発で、途切れることなく質問が出されました。内容は、HPVワクチン、ピルについての他、特に月経痛や生理不順の悩みが多かったです。生理不順については、プロジェクトの助産師・産婦人科医師の丁寧な答えを聞いて納得した表情を浮かべる質問者と、その後同様の質問が次々と連なって出てくる様子を見て、普段女性の健康について意識をする機会や医療者に健康相談をできる機会が非常に少ないのではないかと感じました。今回、国立母子保健センターの助産師や母親学級でインタビューをする機会も頂きましたが、実際に、日頃学校や地域で女性の健康に関する集団健康教育を受ける機会は特に無いとの答えでした。

以上を踏まえると、工場における健康教育は、一般の方が健康や子宮頸がんを含む疾病予防への意識を高め、医療者から正しい知識を得る貴重な機会の提供ができる意義深い事業だと思います。カンボジア初の子宮頸がん検診と健康教育をセットにしたこのユニークなプロジェクトの成功を祈っております。今回、このような、カンボジアならではの講義スタイルを体感し、プロジェクトの活気を肌で感じられる数々の大変貴重な機会をいただきまして、誠に有難うございました。

## プロジェクトを取り巻く動き

- |         |                                |           |                           |
|---------|--------------------------------|-----------|---------------------------|
| 1/5     | : SCGO 理事会                     | 1/28-3/11 | : 西野るり子医師カンボジア派遣          |
| 1/14-21 | : 藤田則子医師カンボジア派遣                | 1/28-2/4  | : 藤田則子医師カンボジア派遣           |
| 1/14-20 | : 赤羽宏基医師カンボジア派遣                | 1/30      | : PPSEZ 内日系電子部品メーカーにて健康教育 |
| 1/15-21 | : 佐藤美紀子医師、ルイズ横田奈朋医師<br>カンボジア派遣 | 1/31      | : プロジェクト理事会               |
| 1/18    | : プロジェクト理事会                    |           |                           |